

支配者の歴史を描く

——ソ連の自国史像にみる植民地支配の描写の変遷

立石洋子

はじめに

本稿はスターリン期のソ連の自国史像における植民地支配の描写の変遷を、当時の歴史家の議論を中心に検討する。植民地支配や戦争といった自国史の負の側面をいかに描くかという問題は、現在においても多くの国で学術的、政治的論争となり続けている。とくに独立以降の旧ソ連諸国では、新国家のアイデンティティの基盤としての自国史像に関心が高まるなか、スターリン期の歴史家の議論を明らかにする一次資料が次々と公開されている。しかし、ソ連体

制による歴史学の抑圧に関心が集中した結果、多くの先行研究は当時の歴史学を政治の道具とみなし、歴史家の議論を内在的に検討したものは少ない。たとえばボルジュゴフとブハラエフ (Bordjugov and Bukharaev 1999) は、当時の歴史家の論争の目的は、公的イデオロギーの弱点を揉み消す方法を当局に提言することであったとする。またアルチゾフ (Artizov 1991) も、歴史学は党・政府の「従順な武器」にすぎず、あらゆる異端が根絶され、歴史学の「スターリン化」が完成したと述べる。

しかし、近年利用可能となった多くの一次資料は、政治的強制のみでは理解することのできない歴史家の論争の存在を明らかにしている。筆者はこれまでの研究で、

一九三〇年代の歴史教育改革とそこにおける歴史家の議論を検討してきた(立石 2008)。そこで本稿では、その後のソ連の自国史像と歴史家の議論の展開を、独ソ戦期から一九五〇年までを対象として検討する。さらにそれを踏まえたうえで、独ソ戦後のソ連の自国史像の変遷を、党・政府の政策の変化だけでなく、歴史家内部の議論の変遷からも明らかにすることが本稿の課題である。

ロシア帝国の領土を継承したソ連は、一〇〇以上の民族を内包する多民族国家として誕生した。帝国主義批判を基本的理念としたソ連では、ロシア帝国の植民地政策は激しい政治的批判の対象となった。ソ連初期のマルクス主義史学もまたこの理念を共有し、十月革命前の歴史学をロシア帝国主義の弁護の手段とみなして否定した。ソ連のマルクス主義史学の創始者ポクロフスキーは、歴史学とは、現代政治と強固に結びつく最も政治的な学問だと述べた。そして帝政期の「ブルジョア歴史学」に対抗し、階級闘争や民族解放闘争を研究する学問としての新たな歴史学が必要だと考えた(Pokrovskii 1933: 17-18, 361; Sidorov 1998: 66-67)。こうした問題意識から一九二〇年代末以降には、自国史を指す用語が「ロシア史」から「ソ連邦史」へと徐々に改称された。

十月革命後、非マルクス主義歴史家の多くは新政権に不服従の態度を示し、これに対して国外追放などの手段が

採られた。ポクロフスキーは政府機関であるロシア共和国教育人民委員部の次官として教育政策全般に権限を持ち、一九二二年に著名な歴史家を含む多くの学術研究者が追放された際には中心的役割を担ったと考えられている(Enteen 1978: 75)。また一九二〇年代末には新政権と協力関係を作り始めていたタルレ、グレコフ、A・ヤコヴレフら多くの著名な非マルクス主義歴史家が、政治的に捏造された事件により逮捕された(土肥 2000: 38-43)。一九三一年冬に行った講演でポクロフスキーは、「アカデミックな道を行つてはならない、なぜなら「アカデミズム」とは「客観的学問」そのものの承認であり、そのような学問は存在しないからだ、と出席者に訴えた(Pokrovskii 1933: 406)。

こうした状況に変化が見られ始めたのは、一九三二年のポクロフスキーの死後のことである。その変化を簡略に述べれば、ロシア史の全否定から部分的再評価への変化であり、ソ連の自国史像の一度目の転機と位置づけることができる。この背景には、ナチス・ドイツの軍事的脅威と反ソ連プロバガンダとの対抗という意図があった。一九三〇年代初頭以降のソ連の歴史学雑誌、教育学雑誌には、ドイツの歴史学における排外主義的傾向と反ソ連的論調を批判する論説が繰り返し掲載され、一九三四年には全連邦共産党中央委員会(以下では党中央委員会と略記)が歴史教育改革に関与し始めた。さらにこの時期には、「ソヴェト愛国

主義」という理念が強調され始めた。この理念はソ連を全世界の勤労者の祖国と位置づけ、対外的には労働者の国際的連帯、対内的には諸民族の平等と友好、植民地政策に対する批判を基本的理念とした。^{*1}

さらに一九三〇年代前半には、一九二〇年代末に完全に排除されたかに思われた「ブルジョア歴史家」が研究教育活動の再開を認められ、党・政府の要請により歴史教育改革に参加し始めた。彼らの多くは、スターリン期を代表する歴史家となった。これに対してポクロフスキー史学は、ロシア史の否定的描写や、外敵との英雄的戦いの描写の欠如などの理由で、公的批判の対象となった。

このなかで一九三〇年代半ばには、ロシアによる植民地支配のうち、ウクライナとグルジアの支配のみが公式見解によって部分的に再評価された。その根拠は、ロシア以外の他国による併合の危険性が存在し、それと比較すればロシアの支配は「より小さな悪」であったというものであった。さらに、イワン雷帝やピョートル一世らロシア君主の功績が、ロシアの拡大・強化と外敵からの防衛という点において再評価され始めた。他方で、階級闘争史観とロシア帝国の植民地支配の否定的描写は、ソ連初期と同様に維持された。

I 二度目の転機

——独ソ戦とソ連史描写の変化

1 ロシア君主の再評価

一九四一年六月二二日のドイツ軍侵攻は、一九三〇年代半ば以降の愛国主義教育の効力を試す試金石となった。歴史的テーマを用いた戦争宣伝が歴史学・歴史教育の重要課題となり、とくにピョートル一世やイワン雷帝に歴史家の注目が集まった。このなかで非マルクス主義歴史家ヴェッペルは、一九四三年九月に行った公開講義で、歴史家は「自分の仕事が完成するまで現代に対する観察をやめる」べきではないとし、過去の偉大な史実のなかに現代性を見出すことが歴史家の「緊急の課題」だと述べた。そのうえで彼は、イワン雷帝をロシア史における最も偉大な軍事指導者の一人だとし、雷帝と国民は愛国主義的思想を共有したと主張した。^{*2} また黨員歴史家のスミルノフは、イワン雷帝によるカザン併合はトルコやモンゴルの襲撃からの防衛を可能にしたとして、その肯定的側面を強調した (Smirnov 1944: 68-69, 72)。これらの主張は、イワン雷帝の階級的支配を強調せず、またカザン併合を「より小さな悪」とみ

なす点で、独ソ戦前の通説とは明らかに異なっていた。

さらに君主の再評価だけでなく、階級闘争史観を見直そうとする主張も現れた。ソ連科学アカデミー歴史研究所長で非マルクス主義歴史家のグレコフは、海軍人民委員部出版会議で、現在では歴史家は「分別を取り戻し」、国家と国民を切り離して研究することは不可能だと理解していると発言した^{*3}。またモスクワ大学歴史学部のエフィモフは一九四二年九月に行われた研究会で、ドイツと戦う我が国ではブルジョアジーや聖職者さえもが統一戦線に加わっている、したがって階級闘争を中心とする記述は不適切だ、と発言した (Kukushkin 2000: 222-223)

2 ドイツのソ連占領

独ソ戦はロシア史研究だけでなく、非ロシア諸民族史研究も活発化させた。とくにドイツ軍の反ソ連プロパガンダとの対抗という観点から非ロシア諸民族史は死活的な重要性を持ち、一九世紀北カフカースにおける対ロシア反乱の指導者であるシャミールや、一七世紀にロシアとウクライナを統合させたフメリニツキーらを主題とする宣伝パンフレットが多数作成された (Tillet 1969: 77-79)。ソ連に侵攻したドイツ軍は、七月末までにバルト諸国とウクライナ、ベラルーシを、一九四二年夏には北カフカースを占領

し、過酷な占領政策を行った。一九三九年にソ連に併合された西ウクライナでは、ドイツ軍の到着を待たずにウクライナ民族主義組織がソ連政府に対する蜂起を始め、ドイツと協力して自治政府を形成しようとしたが、ナチスはこれを認めず、運動の指導者を逮捕し、ウクライナ人の政治活動を禁止した (Alexiev 1988a: 71-73; 1988b: 84)。

他方でナチス内部には、ソ連占領を統括した東方占領地域相ローゼンベルグのように、政治的手段によってソ連内の非ロシア人をロシアから分離させようとする見解も存在した^{*4}。この構想はほぼ実現せずに終わったが、北カフカースでは例外的に、彼の構想に近い政策が部分的に採用された。これは、トルコ政府にソ連のチュルク系諸民族の保護を求める意向が存在するとドイツ側が考えたこと (Dallin 1981: 135)^{*5}。また北カフカース占領の担当者がウクライナ占領政策に批判的であったことなどの理由によるものであった。このため北カフカースの一部では、学校運営などの幅広い自治権が与えられ、コルホーズが廃止された。現地住民は概してドイツ軍に友好的であり、とくに宗教活動の自由化に対する反響は大きく、短期間のうちに教会やモスクが多数再建された。占領政策は戦況がドイツ軍に不利になるにつれて悪化したが、赤軍による北カフカース再占領後にも、多くの住民が反ソ連活動を継続した (Alexiev 1988b: 96-100)。

ドイツ外相リッペントロップもまた、ソ連から亡命した非ロシア人団体の利用と、パン・チュルク主義運動の支援を指示していた (Dallin 1981: 134-135)。さらに駐トルコ・ドイツ大使パーベンは、スラヴ民族の起源を共有するウクライナをロシアとの戦いの支柱とすることは不可能だが、チュルク系諸民族はその支柱にしようとする述べ、彼らに対する宣伝活動の拡大と、ドイツの軍事活動への参加を提案した。ドイツ外務省内のパン・チュルク主義運動の担当者には独ソ戦開戦後の数日間に多くのチュルク系諸民族と面会し、一九四二年一月にはクリミア・タタール民族運動の指導者が彼を訪問して、民族自治領創設の希望を表明した (Giliuzov 1996: 95, 100)。また一九四二年春に外務省が招待した四〇人の亡命者団体のなかには、北カフカースの対ロシア反乱を率いたシャミーリの孫にあたる、サイド・シャミーリも含まれていたという (Dallin 1981: 135)。

これに対してソ連当局は、一九四三年初頭に北カフカースからドイツ軍を追放すると、チェチェン人、イングーシ人、カラチャイ人、バルカル人、またクリミアのタタール人らに対独協力の嫌疑で中央アジアに強制移住させ、チェチェン・イングーシ自治共和国、カバルデイノ・バルカル自治共和国等を廃止するという措置を取った (Doidan 2001: 116-127)。これはソ連当局が、対独協力者の出現やパン・チュルク主義運動の影響力の拡大をソ連に対する重

大な危機とみなしたことを示しており、とくに赤軍の敗退が続いた独ソ戦初期には、ソ連崩壊の危機がより現実的な可能性として認識されていたのではないかと思われる。

3 非ロシア諸民族の反乱の称賛に対する反発

独ソ戦が、非ロシア諸民族に対するドイツの政治宣伝との対抗という性質を帯びるなかで、一部の歴史家からは、非ロシア諸民族の対ロシア反乱を称賛すべきではないという見解が表明され始めた。たとえばタルレは、一九四四年の講演で、ソチに侵攻したドイツ人が「シャミーリを思い出せ」という宣伝ビラをばら撒いている今、ロシア人は過去に強奪的襲撃を行ったと語って敵に宣伝材料を与えることができるだろうか、と発言した。さらに彼は、スターリン憲法の下でカフカース諸民族が生活している現在の状況を悲しむべきだろうかと問い、歴史をポクロフスキー学派の観点からではなく、「一九四四年の観点から見ると」必要性を訴えた。これに加えて、今我々が戦争に勝利し始めている原因のひとつは帝政が獲得した広大な領土にあるとし、ロシアの領土を拡大した君主の功績を否定するのは一九二〇年代に「学生の脳をだめにした」ポクロフスキー学派の理論であり、我々の観点ではないとも主張した (Tarle 2002: 5-10)。

さらに、ロシア共和国教育人民委員部が一九四四年一月に行ったソ連史教科書の審議会では、チュヴァシ人の非マルクス主義歴史家A・ヤコヴレフが、教科書では「ロシア民族主義のモチーフ」を優先することが不可欠だと発言した。ここで彼は、我々はソ連の諸民族に敬意を持っていると述べたうえで、「しかしロシア史はロシア人が作ったのです」と述べ、ロシア史に関する教科書はこの主題に基づいて構成されるべきだと主張した。さらにこの関心を、我が国の一〇〇の民族と両立させることは誤りであろうとも発言し、ニコライ一世に対するシャミールの抵抗を喜ぶべきだという記述は、教科書では不適切だと思われると述べた。^{*6}

独ソ戦期に歴史家の論争が集中したもうひとつの問題は、一九世紀半ばにカザフ人の対ロシア蜂起を率いたケネサルの評価であった。この反乱の評価は一九三〇年代からカザフ共和国の歴史家の間で論争の対象となっており、ケネサルがチンギス・ハンの一族に属する封建君主であることなどの理由から、これを進歩的民族解放運動と見なすべきかについて見解が分かれていた。独ソ戦期に非ロシア諸民族史への関心が高まるなか、一九四三年にモスクワとカザフの歴史家の共同研究によって出版された『カザフ共和国史』は、この反乱を進歩的民族解放運動として称賛した(Pankratova et al. 1943: 89-90)。

本書は高い評価を受けてスターリン賞にも推薦されたが、これに対して本書を審議した歴史家の一部からいくつかの問題が提起された。たとえばA・ヤコヴレフは、本書はカザフ人の民族的高揚に対する情熱的熱意と深い同情から書かれているが、「メダルの裏面ではロシア帝国の政策に対してだけでなく、ロシア人自体に対しても一定の悪意を示している」、またロシア皇帝の行動が、ときにロシアの観点から見た「敵」への共感から語られていると批評した。^{*7}さらに、党中央委員会宣伝扇動局（以下では宣伝扇動局と略記）長アレクサンドロフは、本書をスターリン賞候補から除外するよう指示し、その根拠として、著者の共感が帝政に対する反乱の側にあり、ロシアのための釈明がまったく存在しない「反ロシア的」な書物であるという理由をあげた (Kukushkin 2000: 226)。

これに対して、マルクス主義歴史家でソ連科学アカデミー歴史研究所次長であり、『カザフ共和国史』の編者でもあったパンクラトヴァはスターリンら党中央委員会書記に宛てて、歴史学に「反マルクス主義的傾向」が拡大していると訴える長文の書簡を数回にわたり送付した。党中央委員会は一九四四年五〜七月に歴史家を招いて歴史学会議を開催したが、ここでも一部の出席者は、非ロシア人の反乱の称賛を見直すべきだと積極的に主張した。

なかでもオスマン帝国領出身のアルメニア人で、ソ連作

家同盟会員の作家アジェミヤンは、積極的にシャミーリやケネサルの反乱の称賛を批判した。^{*8}彼は、シャミーリはトルコとイギリスの反ロシア的外交政策に協力したとし、シャミーリの反乱がもし成功していれば、カフカースはトルコに併合されていただろうと述べた。彼によれば、カフカースの大衆はトルコやイランの抑圧からの解放を求めてロシアへの併合を望んでいた。さらに、独ソ戦期の北カフカースで「親ヒトラー的パン・チュルク主義者」の活動という「非常に深刻で悲しい失敗があったことをわずかたりとも忘れてはならない」と述べ、「歴史学にはこれらの地域の動揺と不安定化に対して少なからず罪がある」と、歴史学界を批判した。またシャミーリを称賛する歴史家は、その「伝統的な理想化」が北カフカースに与えた「深刻な影響」を見ようとしていないとも批判し、独ソ戦は歴史学に、これらの史実に「より冷静に対応すること」を教えたのだと主張した。この発言に対しては、多くの歴史家から反論があがった。たとえば『歴史雑誌』編集長ヴォリンはアジェミヤンに対して、「戦争は、同志アジェミヤンが望むような、マルクス・レーニン主義の基盤の見直しを教えているわけではない」と反論した (Kaganovich 1995: 81-82)。また党中央委員会書記シチエルバコフもアジェミヤンに対して、「なぜあなたは党中央委員会に来て、帝政を賛美するのですか」と異議を唱えたという。歴史家デルジャ

ヴィンは、セルビアやブルガリアの諸民族によるオスマン帝国との闘争や、ポーランド人のロシアとの闘争が侵略的植民地政策に対する反乱であったことを疑う者はいないと述べ、なぜカザフ人の対ロシア反乱をこれらと異なった方法で検討せねばならないのかと疑問を呈した。^{*}

このようにアジェミヤンの発言は、帝国主義批判を基本的理念とするソ連歴史学にとって許容し難いものであった。しかし、対独協力者の出現を、ロシアの植民地支配の評価の誤りに結びつけようとする彼の主張は、ロシア史のより積極的な正当化を望む歴史家には歓迎されたと考えられる。さらに、歴史家には対独協力者の出現に対する責任があるという彼の批判は、植民地支配の否定的評価こそがソ連の理念に適うと考える多くのマルクス主義歴史家にも、少なからず動揺を与えたのではないかと思われる。実際に歴史学会議では一部のマルクス主義歴史家のなかからも、アジェミヤンと同様の主張が提起された。^{*10}

アジェミヤンは歴史学会議後にもスターリンらに書簡を送付し、「カフカースの山岳地域とクリミアでの措置は、一人の歴史家、作家、ジャーナリストの良心をも刺激しておらず、私には、この措置がこれらの諸民族の迷いに対する責任であることは明らかです」と述べて、民族強制移住に対する支持を表明した。さらに、歴史学会議で彼を批判した党中央委員会書記シチエルバコフを、祖国防衛におけ

る領土の重要性を認識していないと批判し、「一枚岩ではない多民族国家」として広大な領土は、その弱点を補うという重要な意義を持つと主張し、多民族からなるロシア帝国にとって、中央アジアやカフカースに対する「本能的渴望」^{*11}は合理的であったと述べて植民地支配を正当化しようとした。

オスマン帝国出身のアルメニア人という出自に加えて民族強制移住の実行が、自分の主張が党指導部に受け入れられるという確信を彼に与え、党中央委員会書記を批判するという行為に及ぼせたのだと思われる。また独ソ戦末期のアルメニア共和国では反トルコの論調が高まり、これが同共和国におけるシャミーリの反乱の描写に影響を与えていたという指摘もある。たとえばソ連科学アカデミー・アルメニア支部が一九四五年春に出版したアルメニア人の軍事的英雄のパンフレットでは、シャミーリと戦ったロシア帝国軍のロリス・メリコフやラザレフが取り上げられた (Gasany 2008: 192)。したがってシャミーリの反乱に関するアジェミヤンの見解は、反トルコの感情と結びつく形で当時のアルメニア人に広く共有されていたのではないかと考えられる。

Ⅱ 公的自国史像の転換

1 叙事詩『エディゲ』に対する批判

一九四五年五月にクレムリンに赤軍指導者を招待したスターリンは、独ソ戦初期の絶望的状况で、赤軍は多くの共和国を投げ出したと述べた。これに對してもし他の民族であれば、「立ち去れ、我々はドイツと和平を結び、我々の平穩を守るような他の政府を作ろう」とソ連政府に言ったかもしれない、「しかしロシア人はそうしなかった、……このソヴェト政府に對するロシア人の信頼が、人類の敵であるファシズムに對する歴史的勝利を確実とする決定力となったのだ」と、彼はロシア人を称賛した (Stalin 1997: 228)。主要新聞に掲載され、国民に広く伝えられたこの発言は、ソ連政府に對する不信が非ロシア人に広まっているという党指導部の警戒を反映しているようにも見える。

独ソ戦の開戦後、党指導部が自国史像に関して公式見解を示した最初の事例は、タタル自治共和国の叙事詩『エディゲ』研究に對する批判であった。叙事詩『エディゲ』は、キプチャク・ハン国の後継国家であるノガイ・オルダの創始者エディゲを題材とし、カザフ、クリミア、カザンなど

のチュルク系諸民族にそれぞれの言語で伝わる代表的な英雄叙事詩であり、独ソ戦期に民族史に対する関心が高まるなかで、同自治共和国の知識人の主要な研究テーマとなっていた。これに対して宣伝扇動局は、同自治共和国全域でエディゲを「タタール民族の英雄」とみなす誤った思想が普及している、と党中央委員会に報告した。叙事詩はキプチャク・ハン国の主要な封建領主で「ロシア民族の敵」であるエディゲをタタール民族の英雄として描き、キプチャク・ハン国を称賛するだけでなく、カザン、アストラハン、クリミア、ダゲスタンの諸ハン国の統一という思想を基調としていると、報告は叙事詩を批判した。^{*12}

これを受けて一九四四年八月には党中央委員会が、同自治共和国のイデオロギー活動の改善を要求する決定を採択した。^{*13} さらに宣伝扇動局長アレクサンドロフは一九四五年八月の講演で、連邦諸民族史研究は外敵や帝政ロシア、各民族の支配階級に対する諸民族の戦いといった「諸民族を統合する要素」を描かねばならないと述べたうえで、しかし我が国の歴史家はしばしば諸民族を分離させる要素だけを描いているとして、この叙事詩を批判した (Aleksandrov 1945: 17-18)。

一九四四年五月に叙事詩のロシア語訳を完成させたタタール自治共和国の詩人リプキンの回想によれば、彼は党中央委員会決定の公表の数日前、宣伝扇動局に呼ばれ、ア

レクサンドロフと会談したという。アレクサンドロフは彼の翻訳を評価したうえで、彼が愛国主義をいかに理解しているのか、この叙事詩の主人公は「何という国の愛国主義者なのか」と尋ねた。これに対してリプキンが「キプチャク・ハン国だ」と答えると、エディゲがロシア人を抑圧した愛国主義者であること考慮したのか、とアレクサンドロフは尋ねた。この質問に対してリプキンは、フランスの共產主義者やレジスタンスの参加者は、フランスの最も勇敢な愛国主義者とみなされているが、フランスも植民地に対しては抑圧者であったと答えた。これに対してアレクサンドロフは「あなたは機転が利く」と述べ、「静かに仕事を続けて下さい、我々はあなたを評価しています」と付け加えた。しかしこの会談から数日後には叙事詩を批判する党中央委員会決定が公表され、その理由がリプキンに説明されることはなかった (Utkin 1989: 24)。叙事詩『エディゲ』に関する党決定の採択以降、他の民族地域においても、エディゲを民族の英雄とすることは政治的批判の対象となった。

トルコ政府は一九四四年五月にパン・チュルク主義者の地下組織の摘発を公式に報道したが、これに対して同年の『ボリシェヴィク』誌はパン・チュルク主義運動に対するトルコ政府の対応を批判した。同論説は、トルコ国内のパン・チュルク主義団体はドイツのスパイとしてトルコ国内で反ソ連宣伝を公然と行っており、パン・チュルク主義組

織とドイツの政治家の間に直接の交流があったことは周知の事実だとして、トルコ政府は彼らの活動を黙認したと批判した (Krymskii 1944: 79-83)。この論説からうかがわれるように叙事詩『エディゲ』に対する党の批判の背景には、この叙事詩がパン・チュルク主義運動の理念的基盤となりうるという当局の警戒があったと考えられる。

2 「ソヴェト愛国主義」の変質

第二次大戦の終結は、国際緊張の緩和をもたらすことはなかった。冷戦の対立構造が次第に形成されるなかで、ソ連国内では独ソ戦期の同盟国の影響力の拡大がソ連の政治体制を変化させるという憶測が広まっていることが、党中央委員会の調査で明らかにされた。^{*14} こうした内外の情勢を受けて戦後には西欧への「跪拜」に対する批判と、マルクス・レーニン主義のイデオロギーの原則への回帰に対する要求が公式決定や党指導部の発言に頻繁に現れた。このなかで「ソヴェト愛国主義」の理念も変質し始め、一九四八年頃までには、対外的には西欧諸国との対抗、対内的にはロシア人を中心とする諸民族の結束という二つの要素からこの理念が再構築された。^{*15} その結果、連邦諸民族の団結を破壊しうる民族主義は、西欧の反ソ連勢力に利用されうる誤りであり、「西欧跪拜」の一部だとみなされるようになって

た。

一九四六年八月の『ポリシエヴィク』誌巻頭論文は、近年の共和国史研究にみられる「民族主義的特徴を持つ深刻な誤り」を批判した。同論文は、ソ連の学術研究者は「社会的活動家」であり、「非政治的ではありえない」と強調したうえで、歴史家は帝政ロシアや国外の侵略者に対する連邦諸民族の共闘、社会主義建設の歴史に関心を向けねばならないと主張した。^{*16} また翌年の同誌に掲載された党中央委員会学校局長N・ヤコブレフの論説は、ジュンガルなどの他国による併合の危険性があったカザフ人の併合も、「より小さな悪」であったと主張した (Iakovlev 1947: 28-29)。この論説は、一九三〇年代にはウクライナ、グルジアの併合のみに適用された「より小さな悪」の定式が、一九四六〜四七年頃には党の学術教育政策担当者によって両地域以外の植民地支配にも拡大され始めたことを示している。こうして連邦諸民族の結束を脅かす歴史描写に対する警戒心の高まりは、ソ連の自国史像の方向性を大きく変化させていった。

3 ケネサルの反乱をめぐる論争

一九四三年出版の『カザフ共和国史』でケネサルの反乱の執筆を担当したカザフ人歴史家ベクマハノフは、それを

もとにした論文で一九四六年一〇月に博士号を取得した。

同論文 (Bekmakhov 1947) はケネサルの反乱を進歩的
民族解放運動とする評価を維持し、この反乱の進歩性を否
定する見解を批判した。本書は翌年出版されると高い評価
を受け、科学アカデミー・カザフスタン支部の賞を受賞し
た (Tiller 1969: 117)。

これに対して、一九四八年二月にソ連科学アカデミー歴
史研究所で開かれた本書の検討会議では、ベクマハノフと
同様にカザフ共和国で博士候補の学位を取得したアイダロ
ヴァが、本書を「ブルジョア民族主義的概念の虜」だと批
判し、ハンによる支配の復活を目指した封建君主の運動を
理想化すべきでない」と主張した。カザフ共和国の歴史家
シヨインバエフとアヒンジャノフもまた、この反乱の特徴
は「封建君主の民族主義」だと主張し、ベクマハノフの著
作には封建君主に対するカザフ人の階級闘争が描写されて
いない、と批判した。これに対してソ連科学アカデミー歴
史研究所のドウルジーニンやバフルーシンは、封建秩序が
残存した当時のカザフスタンでは、封建君主が率いる反乱
も進歩的意義を持ったとし、またロシアのイワン雷帝や
ピョートル一世も封建君主でありながら進歩的活動家でも
あったと述べて、ケネサルの功績も彼らと同じ基準で評価
すべきだと反論した^{*17}。

しかし、この議論に関して一九四八年五月に批評を執筆

したパンクラトヴァは、ソ連歴史学に浸透するケネサルの
理想化は「ブルジョア民族主義者」の影響によるものだ
と述べ、階級的利害に基づくケネサルの行動を理想化すべ
きではないと主張した^{*18}。また彼女は、一九四九年九月に歴
史学の課題について講演した際にも、タタール自治共和国
やカザフ共和国の歴史研究における封建君主の理想化を批
判した^{*19}。独ソ戦期にケネサルの反乱の進歩性を主張し続け
た彼女がこうした主張を始めたことから、この時期には比
較的地位の高い黨員歴史家も、ケネサルの反乱の進歩性を
全面的に強調することは困難になっていたといえよう。

4 シャミーリの反乱とケネサルの反乱に 関する公式見解の形成

前述のように独ソ戦後には、ロシアの植民地支配を全面
的に否定することは徐々に困難になっていったが、冷戦に
よる国際的緊張が頂点に達した一九五〇年には、独ソ戦以
降歴史家の論争が集中していたシャミーリの反乱を、反
動的反乱とする見解が公的に示された。同年五月には、
アゼルバイジャンの思想史家グセイノフの著書 (Guseinov
1950) が、シャミーリを肯定的に描写したという理由でス
ターリン賞の受賞を取り消された。『プラウダ』紙がこれ
を伝えると、その二日後にはモスクワ大学で講座会議が開

かれ、パンクラトヴァらがこの決定に反対を表明した。科学アカデミー歴史研究所は、党中央委員会の代表者を招いてこの決定を審議する特別会議を招集しようとしたが、会議の当日に党の代表者が現れず、実現しなかったという (Gashimov 2003: 65)。ゲセイノフの著作に対する批判の経緯の詳細は現在においても明らかになっていないが、ここではアゼルバイジャン共和国党中央委員会書記バギーロフが重要な役割を担ったことが明らかになっている。バギーロフは同年六月にマレンコフに書簡を送付し、本書は重大な政治的誤りを含んでおり、スターリン賞に推薦されたのは誤りだとスターリンに伝えたこと、さらにスターリンの提案により、本書について「適切な決定」が採択されたことを報告していた (Gashimov 2003: 63-64)。

翌月には『ポリシェヴィク』誌にバギーロフの論文が掲載された。ここで彼は、シャミーリの目的は北カフカースにおける支配の確立にあつたとし、シャミーリはトルコの援助を得てカフカース民衆をロシアに蜂起させたのだと主張した。さらに、帝政の植民地政策は過酷であつたとしながらも、ロシアによるカフカース併合は民衆にとって肯定的役割を果たしたと述べた。また同論文はゲセイノフの著作に加えて、シャミーリの反乱を肯定的に評価してきた多くの歴史家や、ソ連史教科書なども批判の対象とした (Bagirov 1950: 21-37)。

続いて同年一二月には、『プラウダ』紙にケネサルの反乱に関する歴史家シヨインバエフらの論説が掲載された。

この論説は、ケネサルは自らの階級の特権の回復のためにカザフ農民の反乱を利用したとし、ケネサルの目的が封建的抑圧の強化にあると気づいた農民は、次第にケネサルに反抗し始めたと主張して、ベクマハノフの説を否定した (Shoinbaev et al. 1950)。この論説の掲載の経緯は不明だが、シャミーリの反乱に対する公式見解の変化がその契機となったと考えられる。これ以降、シャミーリの反乱とケネサルの反乱を称賛することは事実上不可能となった。こうして独ソ戦期に現れたロシアの植民地支配の再評価に対する要求は、冷戦の緊張が頂点に達した一九五〇年に公式見解となるにいたつた。

むすび

本稿で検討してきたように、ソ連の自国史像は独ソ戦と冷戦という対外情勢のなかで大きな変貌を遂げた。ロシア史の再評価は一九三〇年代半ばの歴史教育改革以降にも見られたものの、当時の再評価の対象はロシア国家の統合と強化を示す史実に限定され、また植民地支配のなかで「より小さな悪」として部分的に正当化されたのは、ウクラ

イナとグルジアの併合のみであった。しかし独ソ戦が勃発すると、こうした状況に再び変化が起こった。開戦当初には戦意の高揚とソヴェト政権への忠誠の確保を目的として、各民族の歴史的理想が称賛された。

しかし、ソ連の諸民族に対するドイツ軍のプロバガンダ活動や対独協力者の出現は、民族意識の高まりとソ連からの自立志向に対する警戒を促した。前述のように、叙事詩『エディゲ』に対して宣伝扇動局は、連邦諸民族を分裂させる歴史ではなく統合させる歴史描写を要求したが、これはそのような警戒を反映していたといえよう。

その後冷戦状況が形を明確化させるなかで、一九四〇年代後半には「ソヴェト愛国主義」の意味が変質し、ロシアの植民地支配の否定的評価を強調することは次第に困難になっていった。しかしこのなかでも、ケネサルスの反乱などの論争的テーマに関しては、依然として歴史家の議論が続いていた。政治的介入によりこの問題の議論が不可能となったのは、冷戦の緊張が頂点に達した一九五〇年のことであり、同年にはシャミーリの反乱とケネサルスの反乱に対する否定的評価が公式に示された。

これ以降、歴史家がこの二つの反乱を称賛することは不可能となり、この状況はスターリンが死亡する一九五三年まで継続した。一九五三年以降にはソ連国内ではスターリン批判が起こり、また対外的には平和共存が唱えられ

るなかで、自国史像を見直そうとする歴史家の議論が再び始まることとなる。したがって一九五〇年からスターリンの死までの三年間は、歴史家がきわめて特異な状況におかれた時期であったといえよう。

独ソ戦期から一九五〇年までの公的自国史像の変化の背景に、歴史学を政治の手段として利用しようとする党・政府指導部の意向が存在したことはいうまでもない。しかし、本稿で示したように、シャミーリの反乱やケネサルスの反乱を称賛すべきではないという見解は、公式見解が提示されるよりも前にすでに多くの歴史家によって表明されていた。このことからこの時期の自国史像の変化を、政治による歴史学の統制という側面から説明してきた先行研究の解釈には、部分的修正が必要だと思われる。

スターリン期のソ連当局は積極的に自国史認識に介入し、政治的に望ましい自国史像を構築しようとした。しかしこれは、実際に歴史を書く立場にある歴史家の協力あるいはイニシアチブなしには不可能であった。さらにマルクス主義歴史家はソ連初期から一貫して、歴史学と政治の一体化を進め、新政権の理念を歴史学によって普及させようとした。第一節で述べたように、マルクス主義史学の普及のために一九二〇年代までに採られた手段には、教育・啓蒙活動だけでなく、新政権に忠実でないとみなした非マルクス主義歴史家を研究機関から強制的に排除するといった

強硬手段も含まれた。

こうした初期のマルクス主義史学の政策は、その歴史観に政治的権威を持たせ、それを唯一の正当な支配的通説とした。しかし彼らの歴史観に適合しない研究の可能性を閉ざしたことは、それに対する反感を増大させ、結果的にその学術的正統性を損なったと考えられる。さらにその後の独ソ戦期には、かつて彼らに批判された非マルクス主義歴史家や、独ソ戦前の通説に批判的なマルクス主義歴史家のなかから、歴史学は現代の政治的目的に奉仕すべきだという理由でロシア史をより積極的に再評価しようとする主張が現れた。つまりマルクス主義史学は、歴史学の政治的利用を積極的に認めたことで、彼らに対立する論者が同様に政治的目的から自国史像を書き直そうとする余地を作り出したのであった。

また初期のマルクス主義史学の主張の特徴のひとつは、ロシア帝国の全面的否定にあった。これは、帝政政府を中心的な研究テーマとする十月革命前の歴史学と対抗し、労働者や農民、非ロシア諸民族の歴史を描かねばならないという使命感に基づいていた。こうした志向は当時としては画期的であり、善意の試みでもあった。しかし、ロシア国家の歴史を常に抑圧者として描き、支配者としてのロシア国家と被支配者としての非ロシア諸民族という図式を固定したことは、非マルクス主義歴史家だけでなく、一般のロ

シア人のなかにも少なくない不満を醸成したのではないだろうか。独ソ戦期に一部の歴史家の間にロシア史の再評価への要求が高まり、それが次第に影響力を持つにいたった背景には、こうした不満も存在したと考えられる。^{*21}

歴史家は自国史描写にいかに関わるべきか、自国史は社会に対していかなる役割を持つのか、政治と自国史像の関係はいかにあるべきかという問題は現代でも多くの国において深刻な問題であり続けている。たとえば日本では歴史研究の客観性に疑問を呈し、現在の観点から有益か否かを史実の解釈の判断基準とすべきだという見解が、いわゆる「自由主義史観」だけでなく、第二次大戦期の従軍慰安婦の証言の正当性を訴える論者の一部にも見られる（岩崎2002: 268-269）。またフランスではナチスによる人道犯罪に疑義をはさむ行為を禁止し、奴隷貿易を人道犯罪と規定するなどの一連の「歴史記憶法」と呼ばれる法律が制定され、これに対して二〇〇五年一月に著名な一九人の歴史家がその全廃を求める声明「歴史のための自由」を提出した。この声明は、歴史が議会や裁判所で決定され、歴史家の役割が「正しい」歴史解釈の確定とみなされることに懸念を表明したが、他方ではこの声明に対して、歴史家の社会的責任を軽視しているなどの批判が起こっている（松沼2007: 127）。

さらに一九九一年のソ連解体と独立を経て新国家の建設

過程にある旧ソ連諸国では自国史に対する社会的関心が非常に高い。たとえばロシア連邦では二〇〇二年に歴史学雑誌の『祖国史』編集部が、教師と歴史家を招いてロシア史教育に関する会議を開催した。ここでは自国史教科書は肯定的に記述されるべきだという見解が表明される一方で、歴史研究と教育に政治はいっさい介入すべきでないという見解も表明された。また現在の多くの歴史教科書にはロシア連邦内の非ロシア諸民族の記述が少なく、真に全ロシア的な国民意識の形成は困難な状況にあるという問題も提起された。^{*22} 同誌に掲載されたトレパヴロフ論文 (Trepavlov 2003) も同様に、現在の教科書執筆者には故意のロシア中心主義は見られないものの、多くの教科書はまだロシア民族の歴史にとどまっていると述べる。

ウクライナでは一九三〇年代初頭にウクライナで起こった飢餓を、一九九〇年代末に議会が「ジェノサイド」と認定し、現在ではこの史実が国民史において最も重視される史実のひとつとなっている。^{*23} このなかで歴史家は、ウクライナ人は「超越的な、永久のネイション」であるという本質主義的認識を持ち、民族の「真の」歴史への回帰をスローガンとしている。こうした論調は部分的には「真の」社会主義を求めたソ連のイデオロギーの「模倣」であり、皮肉にも共産党の指令で歴史が国有化された時代を想起させるとも指摘されている (Kasianov 2009: 9-10)。同様にソ連

時代の歴史認識が政治的論争となっているエストニアでは、独ソ戦の解釈をめぐる衝突が続いている。この背景として、エストニアに住むロシア語系住民の疎外感が指摘されているが、その疎外感を生む理由のひとつに、一九九一年以降のエストニアの国家建設がロシア人を他者、あるいは悪者として描く歴史認識を基盤としていることがあると指摘されている (小森 2009: 223-225)。

ソ連が解体して独立国家となった旧ソ連諸国も、複数の民族や宗教から構成される点ではソ連と変わりがない。しかしロシアでは前述のように、多くの教科書がロシア民族の歴史を中心としていると指摘されている。また単一の民族史を求める論調の強い現代ウクライナの歴史学では、国内の歴史認識の多様性は十分には視野に入れられていない^{*24} (Kappeler 2009: 52-55)。

ソ連における自国史像の形成と変遷、またそこにおける歴史家の議論や彼らが担った役割は、これまで十分には着目されておらず、いまだ説明されていない問題も多い。しかしソ連の歴史家が直面したのは、国家の負の歴史や、国民のなかの対立の歴史をいかに描くかという現代の多くの諸国にも見られる問題であった。したがってソ連の自国史像の変遷を、歴史家の議論の展開と政治指導部の政策の変化の両面から検討し、両者の関連をより詳細に明らかにすることは、旧ソ連諸国だけでなく日本や他の諸国における

自国史像の問題を検討するうえでも貴重な事例研究となりうるだろう。

●注

- * 1 *Za kommunisticheskoe prosteschenie* 1935.
- * 2 *Stenogramma publichnoi lektsii*.
- * 3 *Rossiiskii gosudarstvennyi arkhiv sotsialnoi i politicheskoi istorii* (RGASPI), F.88, Op.1, D.1049, L.10-15.
- * 4 ローゼンベルグはロシア帝国領のエストニアで生まれ、ロシア革命時にドイツに亡命したバルト・ドイツ人であり、ソ連の諸民族の民族的、文化的、人種的異質性を認識していたとされる (Dallin 1981: 47-49)。
- * 5 トルコ政府は独ソ戦に関して公式見解を示すことはなかったが、トルコ外相サラジヨグルは一九四二年四月にドイツ大使パーベンに対して、トルコはロシアの四千万人のチュルク系諸民族の運命に関心を持たずにはいられないとし、もし彼らの自治領が成立すれば、チュルク意識の形成のためにこれらの地域の若者をトルコに派遣する必要があると述べた (Giliuzov 1996: 101)。
- * 6 RGASPI, F.88, Op.1, D.1049, L.5-6.
- * 7 RGASPI, F.17, Op.125, D.224, L.23-25.
- * 8 RGASPI, F.17, Op.125, D.223, L.84.
- * 9 歴史学会議での議論については *Voprosy istorii* (1996a: 61-67); *Voprosy istorii* (1996d: 76, n.20); *Voprosy istorii* (1996c: 96-102) 参照。
- * 10 *Voprosy istorii* (1996a: 55-58); *Voprosy istorii* (1996b: 106-

107).

- * 11 RGASPI, F.17, Op.125, D.223, L.81-82.
- * 12 RGASPI, F.17, Op.125, D.290, L.1-9.
- * 13 *KPSS v rezoliusiakh*, pp.513-520.
- * 14 農村部では「アメリカがすでにコルホーズの解体を決定したという」「不健全な」噂が広まり (Zubkova 2000: 63-64) 作家やジャーナリストの間では「同盟国の影響で」戦後ソ連の政治体制を改革するのを希望する声があると報告された (Artizov et al 2002: 487-499)。
- * 15 *Uchitel'skaia gazeta* 1947.
- * 16 *Bolshevik* 1946: 7.
- * 17 *Vestnik akademii nauk Kazakhskoi SSR* 1948: 35-58.
- * 18 *Arkhiv rossiiskoi akademii nauk* (RAN), F.697, Op.1, D.207, L.1 ob-2.
- * 19 *Arkhiv RAN*, F.697, Op.1, D.72, L.56.
- * 20 *Pravda* 1950, March 14.
- * 21 支配者と被支配者という二項対立の図式による歴史理解の問題点については、小熊の研究 (2003) から示唆を得た。
- * 22 *Otchestvennaia istoriia* 2002: 5-7, 30-32.
- * 23 ウクライナの急進ナショナリストには、ソ連の後継国であるロシアに、飢餓に対する謝罪を要求する見解がある。これに対してロシア・ナショナリズムの立場に立つ作家ソルジェニツィンは、飢餓の原因はウクライナ人を含む共産党上層部の失政にあり、ウクライナ人抹殺が目的ではなかったとして、これを民族的ジェノサイドとするのはポリシェヴィキ顔負けのデマ宣伝だと激しい反発を示している (塩川 2008:

173)。

* 24 たとえば西ウクライナでは住民の半数が、一八世紀にロシアに反旗を翻したマゼッパについて肯定的認識を持つのに対して、東部住民ではそれは二割にとどまる。またウクライナ人の英雄とされるフメリニツキーは、ユダヤ人にはボグロムの歴史と、ポーランド人には祖国の弱体化と分割と結びつけて認識されている (Kappeler 2009: 52-55)。

●参考文献

- 岩崎稔 (2002) 「歴史学にとっての記憶と忘却の問題系」歴史学研究会編『歴史学における方法的展開 現代歴史学の成果と課題 一九八〇～二〇〇〇年』青木書店、二六三～二八二頁。
- 小熊英二 (2003) 『日本人の境界 沖繩・アイヌ・台湾・朝鮮 植民地支配から復帰運動まで』新曜社。
- 小森宏美 (2009) 『エストニアの政治と歴史認識』三元社。
- 塩川伸明 (2008) 『民族とネイション——ナショナルリズムと「ナショナリズム」の境界』岩波書店。
- 立石洋子 (2008) 「ソ連における「国民史」の創造——一九三〇年代の初等歴史教科書作成問題を手がかりに」『歴史学研究』八四五号、一―一七頁。
- 土肥恒之 (2000) 『岐路に立つ歴史家たち——二〇世紀ロシアの歴史学とその周辺』山川出版社。
- 松沼美穂 (2007) 「植民地支配の過去と歴史・記憶・法——近年のフランスでの論争から」『ヨーロッパ研究』六号、一一九―一二二頁。
- Aleksandrov, G. (1945) O nekotorykh zadachakh

obshchestvennykh nauk v sovremennykh usloviakh.

Bolshevik 14: 12-29.

Alexiev R. Alexander (1988a) German War Objectives and Soviet Nationalities. Alexiev, A.R., Wimbush, S.E. (eds.) *Ethnic Minorities in the Red Army: Asset or Liability?* Boulder and London: Westview Press, pp. 71-79.

Alexiev R. Alexander (1988 b) German Occupation Policies and the Nationalities. Alexiev, A.R., Wimbush, S.E. (eds.) *Ethnic Minorities in the Red Army: Asset or Liability?* Boulder and London: Westview Press, pp. 81-106.

Artizov, A.N. (1991) V ugodu vzzhiadani vozhdia (Konkurs 1936 g. na uchebnik po istorii SSSR) *Kantaur* October-December, pp. 125-135.

Artizov, A.N. (2002), Naumov, Oleg(eds.) *Vlast i khudozhestvennaia inteligentsiia: dokumenty, VChK-OGPU-NKVD o kulturnoi politike. 1917-1953 gg.* Moskva: Mezhdunarodnyi fond "Demokratia".

Bagirov, M.D. (1950). K voprosu o kharaktere dvizheniia miuridizma i Shamilia. *Bolshevik* 13: 21-37.

Bekrnakhanov, E. (1947) *Kazakhstan v 20-4. gody XIX veka*. Alma-ata: Kazakhskoe ob'edinnnoe gosudarstvennoe izdatelstvo.

Bolshevik (1946) Sovetskaia obshchestvennaia nauka na sovremennom etape (no.15) pp.1-10.

Bordiugov, G., Bukharaev, V. (1999) Natsionalnaia istoricheskaia mysl v sovetskogo vremeni. Aimermakher,

- K., Bordingov, G. (eds.) *Natsionalnye istorii v sovetских i postsovetskikh gosudarstvakh*. Moskva: AIRO-XX, pp.29-73.
- Dallin, Alexander (1981) *German Rule in Russia 1941-1945: A Study of Occupation Policies*. Second edition, London: The Macmillan Press LTD.
- Enteen, George M. (1978) *The Soviet scholar-bureaucrat: M.N. Pokrovskii and the Society of Marxist historians*. University Park: Pennsylvania State University Press.
- Gasany, Dzhanmil (2008) *SSSR - Turtsiia: ot neitralneta k khodnoi voine 1939-1953*. Moskva: Tsentr Propagandy.
- Gashimov R.R. (2003) Borba gorisev severo-vostochnogo kavkaza 20 - 50- kh godov XIX veka v sovetской istoriografii (Dissertatsiia kand. ist. nauk, Dagestanskii gosudarstvennyi universitet).
- Giliazov, I. (1996) Panturkizm, Panturanizm i Germaniia. *Etnograficheskoe obzorenie* 2: 92-103.
- Guseinov G. (1949) *Iz istorii obshchestvennoi i filozofskoi mysli v Azerbaidzhane XIX v.* Baku: Akademii nauk Azerbaidzhanskoi SSR.
- Iakovlev, N. (1947) O Prepodavanii otechestvennoi istorii. *Bolshevik* 22: 26-37.
- Kaganovich, B.S. (1995) *Evganii Viktorovich Tarle i peterburgskaia shkola istorikov*. Sankt-peterburg: Dmitrii Butanin.
- Kappeler, Andreas (2009) From an Ethnonational to a Multieθνic to a Transnational Ukrainian History. Kasanov, G., Ther, P. (eds.) *A Laboratory of Transnational History: Ukraine and Recent Ukrainian Historiography*. Budapest and New York: Central European University Press, pp.51-80.
- Kasanov, Georgy (2009) "Nationalized" History: Past Continuous, Present, Future... Kasanov, G., Ther, P. (eds.) *A Laboratory of Transnational History: Ukraine and Recent Ukrainian Historiography*. Budapest and New York: Central European University Press, pp.7-23.
- KPSS v rezolutsiiskh i resheniiskh s'ezdov, konferentsii i premmov TsK*, 9 edition, t.7. Moskva: Politizdat 1985.
- Krymskii, V. (1944) Panturkisty - fasisiskai agentura v Turtsii. *Bolshevik* 10-11: 79-85.
- Kukushkin, Iu.S. (eds) (2000) *Istoriik i vremia: 20-50-e gody XX veka. A.M. Pankratova*. Moskva: Izdatelstvo Rossiiskogo universiteta druzhby narodov.
- Lipkin, S. (1989). Bukharin, Stalin i «Manas». *Ogonek* 2: 22-24.
- Otechestvennaia istoriia* (2002) Kakim byl shkoloim uchebniku po otechestvennoi istorii XX veka? «Kruglyi stol» (no.3), pp.3-56.
- Pankratova, A., Abdykalykov, M. (eds) (1943) *Istoriia Kazahskoi SSR s drevneishikh vremen do nashikh dnei*. Alma-ata: KazOGIZ.
- Pravda* (1950) V komitee po Stalinskim premmiam v oblasti literatury Iiskusstva (March 14).
- Pokrovskii, M. N. (1933) *Istoriicheskaia nauka i borba klassov. II*. Moskva, Leningrad: Sotsialno-ekonomicheskoe izdatelstvo.

Poitan, Pavel (2001) Ne po svoei vole... Istorii i geografiia primidielnykh migratsii v SSSR. Moskva: OGI - Memorial.

Sidorov, A.V. (1998) *Marksisitskaia istoriograficheskaia mysl 20-ih godov*. Moskva: Universitskii gumanitarnyi litsei.

Smirnov, Il (1944) *Ivan Groznyi*. Leningrad: Gospolitizdat.

Shoinbaev T., Aidarova Kh., Iakunin, A. (1950) Za Marksistsko-leninskoe osveshchenie voprosov istorii Kazakhstana. *Pravda* (December 26).

Stalin I.V. (1997) Vystupleniia na prieme v kremle v chest komandyriushchikh voiskami krasnoi armii 24 maia 1945 goda. *Sochiniinia*. T.15. Moskva: Pisatel.

Stenogramma publichnoi lektsii akademika Vipiper R. Iu., prochtannoi 17 sentiabria 1943 goda v Kolonnom zale Doma Soiuзов v Moskve. Moskva: Lektсионное биuro, 1943.

Tarle, E. V. (2002) 1944 god. Ne peregribat' palku patriotizma. Doktrud akademika Tarle na Uchenom sovete Leningradskogo universiteta - O roli territorial'nogo rosshieniiia Rossii v XIX veka (no.6). *Voprosy istorii* 6: 3-13.

Trepavlov, V.V. (2003) Narody Rossii v shkolykh uchebnikakh po otechestvennoi istorii (do XX v.) *Otechestvennaia istoriia* 1: 114-120.

Tillet, Lowell (1969) *The Great Friendship: Soviet historians on the no-Russian nationalities*. Chapel Hill: University of North Carolina Press.

Uchiitskaia gazata (1947) Vospityvat uchashchiusia molodezh v dukhe sovet'skogo patriotizma (august 23).

Vestnik akademii nauk Kazakhskoi SSR (1948) Obsuzhdenie monografi E. Bekmakanova «Kazakhstan v 20 - 40-e gody. XIX veka» (no.3), pp.35-58.

Voprosy istorii (1996a) Stenogramma soveshchaniia po voprosam istorii SSSR v TsK VKP(b) v 1944 godu, zasedanii 1 i iunია 1944 g. (no.2), pp.55-86.

Voprosy istorii (1996b) Stenogramma soveshchaniia po voprosam istorii SSSR v TsK VKP(b) v 1944 godu. Zasedanie 5 i iunია 1944 g. (no.3), pp.82-112.

Voprosy istorii (1996c) Stenogramma soveshchaniia po voprosam istorii SSSR v TsK VKP(b) v 1944 godu. Zasedanie 22 i iunია 1944 g. (no.5), pp.77-106.

Voprosy istorii (1996d) Stenogramma soveshchaniia po voprosam istorii SSSR v TsK VKP(b) v 1944 godu. Zasedanii 8 i iunია 1944 g. (prodolzhenie)(no.9), pp.47-77.

Za kommunisticheskoe prosveshchenie (1935) Sotsialistsheskaia rodina i sovet'skii patriotizm (April 4).

Zubkova, E. (2000) *Poslevoennoe sovet'skoe obshchestvo: politika i porvedenemost. 1945-1953*. Moskva: ROSSPEN.

(たぐろし・ちん)／東京大学大学院
法学政治学研究所博士課程単位取得退学)